

2024 年度 「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」 報告書

「学生のキャリアデザインとキャパシティビルディングを支援する」

研究代表者 佐藤 和弘（法学部）
共同研究者 落合 雄彦（法学部）
國重 裕 （経営学部）
安田 圭史（経済学部）

はじめに

学部共通コースとして 1989 年度に始まった国際関係コースは、2024 年度には 35 年目となり、第一期卒業生はすでに 50 歳代後半を迎え、2000 名を超える、本コースで国際感覚を培った卒業生が社会のさまざまな分野で活躍している。この豊かな人材を活かした国際関係コースならではの「進路支援」（キャリアデザイン支援）のあり方を模索・開発すること、また、本コースのカリキュラムの中心の一つである「研ぎ澄まされた国際感覚」を多角的に育成していくことが求められている。この 2 点を踏まえ、以下の二つを柱とするプロジェクトを立ち上げた：

- 1) キャリアデザイン支援の中核としてメンタリングを実施する：30 余年にわたる国際関係コースの人材を活かし、卒業生がメンターとなり、メンティーである現役生とのメンタリングを通して、学生のキャリアデザインを支援する交流の場を設ける。
- 2) キャパシティビルディング支援の中核として学生主体によるイベント（ワークショップ、講演会、パネルディスカッション、映画上映会など）を実現する：国際関係コースの理念・目的の一つである、国際社会が直面する諸問題、異なる価値観や文化に対する研ぎ澄まされた国際感覚を育てることを、ワークショップ、講演会、パネルディスカッション、映画上映会などの企画を通して学んでいく。

プロジェクトを進めるにあたり、2024 年度前期においては、4 年生は就職活動、卒論執筆準備等によりプロジェクトへの参加は負担が大きいと想定されたが、前半においては時間の許す限り積極的に活動してくれたことに、感謝の意を表したい。全体の流れとしては、3 年生を中核として、国際関係コースの各ゼミから学生委員を選出し、コース生と教員からなる「プロジェクト検討委員会」を組織した。プロジェクト検討委員会は学生の主体性を重視し、コース生の積極的な活動を尊重するものとし、教員はアドバイザーにとどまり、プロジェクトが遂行された。2024 年度後期からは、2 年生ゼミも参加した。

1. 本プロジェクトの活動内容

2024 年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」ではコース生の「キャリアデザインとキャパシティビルディング」の支援を以下のプログラムで行なった。

1.1. キャリアデザイン支援

国際関係コースは第 1 期卒業生を輩出してからすでに 30 年以上を経過しているが、これまではキャリア支援の観点から卒業生と在學生を結ぶプロジェクトは行われてこなかった。すでに 2000 人を超える卒業生の豊かな人材を活かすべく、国際関係コースの進路・就職支援を「キャリアデザイン支援」というテーマで、プロジェクトへの参加を現役生および卒業生たちに呼びかけた。

1.1.1. メンターシッププログラム

キャリア支援は学生の資格取得と就職を支援するための全学的な取り組みであり、各学部からキャリア主任・キャリア委員が選出され、「キャリア支援会議」が設けられている。学部共通コース生は学部には所属しており、学部からのキャリア支援を受けることができるが、さらに国際関係コースがコースの特徴を活かしたキャリア支援として、今回は卒業生と在學生の交流、本学法学部がすでに取り組んでいる「メンターシッププログラム」を通してキャリア支援を行うこととした。法学部はメンターシッププログラムを以下のように説明している：

メンターシッププログラムは、本学法学部卒業生等を中心とした社会人がメンター（相談相手、アドバイザー）となって、社会人として培ってきたキャリアや学生時代の経験を活かしながら、本学法学部生・法学研究科生であるメンティー（アドバイスを受ける人）に対して、進路選択やキャリア形成に関するアドバイスをを行うプログラムです。

いろいろな情報があふれている時代ですが、本学法学部卒業生を中心とする社会経験ある方から、直接、アドバイスを受けることによって、メンティーの進路選択やキャリア形成に対して判断材料を提供することや、メンティーがキャリア形成に関して考えるきっかけとなることを目的としています。

（出典：<https://www.law.ryukoku.ac.jp/mentorship/#>）

今回もプロジェクトでは達成できなかったが、学部が設けるキャリア支援に加えて、国際関係コースで国際感覚を培った卒業生がメンターとなり、メンティーである本コース生に直接アドバイスできるような国際関係コース独自の交流の機会を設けることがこれからの課題となる。

1.1.2. 進路支援と「メンターフェア」

今回の FD 研究開発プロジェクトにおいては既存の法学部メンターシッププログラムへの試験的合流を行い、本コースの「進路支援」のあり方を模索し、今後のキャリア支援開発の手がかりを探ることを主眼とした。

法学部メンターシップ委員会から国際関係コース生がメンターシッププログラムの一つである「メンターフェア」に参加することの許可を得た。各ゼミ、本コース HP、また講義等を通して本コース生に周知し、「メンターフェア」への参加を促した。2024 年度のメンターフェアは 3 回（第 1 回目 11 月 8 日金曜日、第 2 回目 11 月 22 日金曜日、第 3 回目 12 月 6 日金曜日）開催された。参加メンターは民間企業、公務員に加え、法学部に特徴的な士業（弁護士・税理士・社会保険労務士・行政書士）など、法学部生の「進路」を念頭に置いた職種から構成されている。国際関係コース生にとっての進路支援の一つとして今後メンターシッププログラムを導入するとなれば本コースの特徴を活かした分野で活躍しているメンターを集めることが重要となる。

法学部のメンターシッププログラムは、

- ① メンターとメンティーが 1 対 1 で面談を行う個別メンタリング
- ② 決められたテーマについて、メンターと 10 名程度の学生がグループディスカッションを行うメンターラウンジ
- ③ 数名のメンターが一人ずつテーブルに座り、学生が関心のあるメンターの話を聞くメンターフェア

の 3 つから構成されているが、今回の FD 研究開発プロジェクトでは、③のメンターフェアしか本コース生に提供できなかったが、今後は①の個別メンタリング、②のメンターラウンジを設けることが重要となろう。

今回キャリア支援の一つの可能性として法学部が取り組んでいるメンターシッププログラムの一部（メンターフェア）にコース生が参加する機会を得たが、一方で、このプログラムを本コースで実践していくのは予算、人員などを考慮すると極めてハードルが高いものであることがわかった。

参考 URL:

法学部メンターシッププログラム：

<https://www.law.ryukoku.ac.jp/mentorship/activity.html>

2025 年度メンター登録のお願い（チラシ）：

https://www.law.ryukoku.ac.jp/mentorship/pdf/mentor_241209_1.pdf

1.2. キャパシティビルディング支援

国際関係コースのモットーは、“The world is our field.”（世界がわたしたちのフィールド）である。本コースでは、コース生が本学キャンパスだけではなく、広く世界をフィールドとして学び、考え、そして行動することができるような学生の学びをサポートしている。今回のプロジェクトではコース生の「異なる価値観や文化に対

する研ぎ澄まされた国際感覚を育てること」を目指し、世界のある国、地域の問題を扱った映画を上映し、関連テーマでの講演会の企画、パネルディスカッションを行った。このプロジェクトの準備として「2024 年度 国際関係コース FD 研究開発プロジェクト」検討委員会（以下検討委員会とする）が立ち上げられた。検討委員会は火曜日昼休みの時間帯（12 時 45 分 ～ 13 時 15 分）に計 10 回、総括・反省会として第 11 回目、総計 11 回開催された。場所は第 4 回以降国際関係コースコモンルームを使用した。検討委員会は、学生の主体性を重視し、コース生の積極的な活動を尊重することを旨とすることから、第 1 回検討委員会において教員が FD プロジェクト概要の説明を行い、学生の中から検討委員会委員長・副委員長が選出された後は委員長が司会者を務め検討委員会が進められた。

1.2.1. プロジェクトの構成および上映映画の選出

今回のキャパシティビルディング支援プロジェクトは「① 映画会の上映、② 関連テーマの講演会、③ パネルディスカッション」の 3 本立てで行うことが決定された。上映映画は「世界のある国、地域の問題を扱った」ものであることが決定され、以下の 4 本の映画がゼミ代表者から提案され、テーマの説明がなされた：

- a. 『禁じられた声』（マリ共和国）：マリ共和国のイスラム過激派による弾圧
- b. 『アミナの運命』（ガーナ）： アフリカの貧困と女性の社会的境遇
- c. 『82 年生まれ キム・ジョン』（韓国）：韓国社会における女性の生きづらさの問題
- d. 『42 世界を変えた男』（アメリカ合衆国）：アメリカ社会における人種差別問題

貧困・ジェンダー・人権問題・差別といずれもその地域社会の問題を扱った映画であり、上映映画の決定は容易ではなかった。意見交換を行った後、投票を行った結果、人種差別問題を扱った『42 世界を変えた男』が選出された。

1.2.2. 講演会とパネルディスカッションの準備

次に関連テーマの講演会として、アメリカの人種差別問題に詳しい講演者を紹介してもらうために関西にある NPO 団体に問い合わせたところ、「NPO で活動している人には人権問題と取り組んでいる人は多くいるが、人種差別、とりわけ今回の上映映画のテーマでもあるアメリカにおける黒人差別問題を専門としている人はほとんどいない、このような分野では高等教育機関で専門に研究をしている人がいるのでは」という回答・助言を受け取った。そこで大学においてアメリカにおける黒人差別問題を専門にしている研究者を探すことになった。学内（龍谷大学）の教員に問い合わせたところ、北海学園大学の大森一輝教授の紹介を受けた。大森氏は「アメリカ黒人解放史」を研究テーマとしており、大森氏に講演を依頼したところ、快諾いただいた。ただし問題として、

札幌と京都という距離、また、大森氏も予定している講演会の日程である12月8日金曜日は大学での講義が入っているため、対面での講演会は不可能であった。そこでオンラインでの講演会を実施することとなった。

講演会後のパネルディスカッションの準備として、大森氏より紹介された以下3点の資料を中心に勉強会を開くこととなった：

杉上忍、『アメリカ黒人の歴史』、中公新書2209、2013年

ニール・ホール；大森一輝訳、『ただの黒人であることの重み：ニール・ホール詩集』、彩流社、2017年

兼子歩／貴堂嘉之編著、『「ヘイト」に抗するアメリカ史：マジョリティを問い直す』、彩流社、2022年

勉強会においては、「人種差別、黒人とは何か、ヘイト」を中心テーマに扱ったが、講演会においては「人種とは何か、差別とは何か？」という問題にも言及され、総括・反省会において今後の問題としてこのテーマに取り組むこととなった。関連書籍として以下のものを挙げておく：

森川美生／大森一輝、『「もう差別なんてない」と思っているあなたへ』、小鳥遊書房、2024年

1.2.3. 映画上映と著作権問題

映画上映会では、学内における映画上映に関して著作権問題が浮き上がった。今回の「教養教育・学部共通コースFD研究開発プロジェクト」は大学における教育の一環として行われており、営利を目的とせず、また、参加者から料金等を受け取らないことから、「権利制限規定の一つ」に当たるとはならないかと考えた。その根拠は、以下の「非営利・無料・無報酬の場合の上映等」に関する文化庁HPに掲載されている著作権解説集の説明である：

権利制限規定の一つです。公民館での映画の上映会、学校の学芸会でのお芝居の上演、市民グループの楽器演奏発表会、インターネット画面のディスプレイなど、非営利・無料・無報酬で著作物を利用する場合、著作権者の許諾は必要ありません。

（出典：文化庁HP「非営利・無料・無報酬の場合の上映等」

https://pf.bunka.go.jp/chosaku/chosakuken/h22_manga/comment/list_ha.html）

条件としての6項目挙げられている：

1. 「上演」「演奏」「口述」「上映」のいずれかであること（「コピー・譲渡」や「公衆送信」は含まれない）

2. 既に公表されている著作物であること
3. 営利を目的としていないこと
4. 聴衆・観衆から料金等を受けないこと
5. 出演者等に報酬が支払われないこと
6. 慣行があるときは「出所の明示」が必要

今回の映画上映会においては6条件をすべて満たしており、権利制限規定の一つとして著作権の侵害にあたらないのではと考えたが、一方で、学内における映画上映会は著作権に関しては「グレーゾーン」であるという意見も多数聞かれるので、学内の機関に問い合わせしてみたが、著作権に関する明確な回答は得られなかった。また、映画の配給に詳しい関係者から、「市販のDVDには「個人が家庭内において視聴する目的」との記載があり、無断で上映会はできないこととなっている」という意見も得た。そこで今回の上映会では著作権処理がなされた「上映可」のDVDを配給会社から借りることに決定した。

1.2.4. チラシ（ポスター）の作成と著作権



FD 研究開発プロジェクト 国際関係コース
上映会
大森一輝 氏 講演

プログラム
★11:00～11:50
演会
★12:00～12:30
パネルディスカッション
★12:40～14:50
上映会

人種とは何か、差別とは何か？
～アメリカ黒人の歴史から学ぶ～
日曜：12月6日（金） 11:00～15:00 場所：和顔館B104

あらすじ
史上初の黒人メジャーリーガーとなったジャッキー・ロビンソンの半生を、ブルックリン・ドジャース（現ロサンゼルス・ドジャース）のジェネラル・マネージャー、ブランドン・リッキーとの交流を軸に描いたドラマ。1947年、ブルックリン・ドジャースのGMだったリッキーは周囲の反を押して、ロビンソンとメジャー契約を結ぶ。

研究テーマ
アメリカ黒人解放思想史。「どのように差別をなくしていくべきか」について黒人コミュニティ内部にもあった考え方の違いを歴史的にづけ、どこに希望があるのかを考えようとしています。

主催 | 龍谷大学国際関係コース お問い合わせ | sato_g23

今回の国際関係コース FD プロジェクトを学内に周知するために、チラシ（ポスター）の作成に取り掛かった。当初、上映映画の紹介として映画のポスター（画像）の一部を取り込んだチラシを作成したが、これは著作権の問題に抵触することがわかった：

- － 許可なくポスター（画像）の一部を使用することは著作権の侵害となること
- － 著作権処理がなされたポスター（画像）のみが使用できるということ

を学ぶ機会を得たことは今回貴重な経験となった。コース生が紆余曲折を経て無事チラシを完成することができた。

おわりに

今年度のFDプロジェクトではコース生に向けた「キャリアデザイン」と「キャパシティビルディング」の二本立ての支援プロジェクトを行なった。進路支援、就職支援を主眼とする「キャリアデザイン」においては法学部のメンターシッププログラムに合流することができ、本コース独自のキャリア支援の可能性を考える機会となった。総括としてコース生を対象としたアンケート調査（下記※参照）を、manabaを通して行なったが、アン

ケート集計結果は残念ながら回答者は5名（2年生1名、3年生4名）のみにとどまった。アンケート調査でわかったこととして、メンターシッププログラムを知っていたのは5名中2名のみ、2024年度国際関係コースFDプロジェクトとしての「メンターフェア」のことを知っていた学生は1名のみであった。また、「メンターフェア」に参加した学生は0名であった。「メンターフェア」に関しては、ゼミ・講義・国際関係コースHP等を通して学生に周知されていたにも関わらず、コース生においてはほとんど認知されていなかったようである。今後の課題として国際関係コース独自の「キャリアデザイン」の検討が必要である。

※ メンターシッププログラムに関するアンケート調査：<https://forms.gle/G7gALvQtczQFuS3P9>

「キャパシティビルディング」においては、総計11回を重ねた検討委員会が開かれていることから見て取れるように、綿密な計画を立てながらプロジェクトが進められた。12月6日に開催されたプロジェクトではまず大森一輝教授（北海学園大学人文学部英米学科）が、アメリカ社会における黒人に対する差別の歴史において「人種とは何か、差別とは何か」に焦点をあて講演を行なった。引き続きコース生が主体となったパネルディスカッションが開催され、パネラー、フロア、講演者大森氏の間で活発な質疑応答が行われた。最後に締めくくりとして映画『42 世界を変えた男』が上映され、無事今年度の「国際関係コースFD研究開発プロジェクト」を終えることができた。なお、プロジェクトの総括・反省会として第11回検討委員会が2025年1月14日に開催された。

最後に、国際関係コースでは毎年12月に異文化研究会・交流会が開催されている。異文化研究会は新しく本コース生となった2年生が主体となって研究発表が行われ、その後、親睦を深めるための交流会が開かれている。コロナ禍の期間は交流会が中止となり、コース生全員が集まる機会がない状況が続いていた。しかし、今回のプロジェクトで検討委員会が組織されたことによって、学年、ゼミの垣根を超えたコース生の活動が再開することができた。これもこのプロジェクトの貴重な成果の一つである。